

2020 年度第 1 回町田市廃棄物減量等推進審議会 議事要旨

◇日 時：2020 年 7 月 9 日（木）18：30 から 20：20

◇場 所：町田市役所 2 階 市民協働おうえんルーム

◇出席者

委 員：永井委員（会長）、山下委員（副会長）、江尻委員、篠木委員、富岡委員、小山委員、鈴木委員、守谷委員、高橋委員、藤根委員、芦田委員、伏見委員

町田市：環境資源部長、循環型施設建設担当部長、環境政策課長、循環型施設整備課長、資源循環課長、3R 推進課長、3R 普及担当課長 外

◇傍聴者：1 人

<次 第>

議題

1. 2019 年度一般廃棄物資源化基本計画の進捗点検の結果について
2. (仮称) 第 2 次町田市一般廃棄物資源化基本計画について
 - (1) (仮称) 第 2 次町田市一般廃棄物資源化基本計画の骨子について
 - (2) (仮称) 第 2 次町田市一般廃棄物資源化基本計画の減量・資源化の個別目標と削減量について

<資料>

資料 1-1：2019 年度一般廃棄物資源化基本計画の進捗点検の結果について（報告）（案）

資料 1-2：評価シート集計表

資料 2-1：(仮称) 第 2 次町田市一般廃棄物資源化基本計画骨子（案）

資料 2-2：減量・資源化の個別目標と削減量（案）

参考資料 1：(仮称) 第 2 次町田市一般廃棄物資源化基本計画策定スケジュール

1. 議題

2019 年度一般廃棄物資源化基本計画の進捗点検の結果について

<資料 1-1、1-2 について、事務局から説明>

《意見》

- 委 員：報告書の最後に 2019 年度のごみが増加した理由があげられているが、根拠を聞かれた場合説明できるのか。それから、紙類の評価が B になっているが、A 評価の委員も何人かいる。多数決というのもおかしいので、A ということを強く主張される委員の考え方をどのように織り込んだらよいのか。また事業系ごみについては、最終評価は B だが、C も多い。C の意見の委員に対する説明理由を考えておいたほうがよいのではないか。A・B・C の付け方は個人的な意見だと思うが、最終報告書の目標評価は多数決ではまずいのではないか。
- 環境政策課：消費税については昨年 10 月からの増税に伴い、ごみの収集量は 9 月、10 月が多くなっている。推測という形ではあるが、増税前の買い替え需要が影響したのではないかと書かせていただいている。事業系ごみについては、こちらも南町田の大規模店舗の開設があった。排出量は分かっているのをそれを書かせていただいている。
- 委 員：草類が入っていないのはどうしてか。
- 環境政策課長：現在のアクションプランを作ったときは、草木の部分をターゲットとしていないため、アクションプランについては生ごみに限定しており、今回はその部分に対する評価を頂いている。草木の量は別であり、それは今後ご議論を頂けたらと思う。
- 会 長：ターゲット 1 生ごみの部分に対する評価について、他にご意見はないか。
- 委 員：厳しめに付けたが、皆さんの平均的な評価ということで最終的に C になることは特に異論はない。
- 会 長：ターゲット 2 紙類の評価についてご質問やご意見等はあるか。なければ、ターゲット 3 事業系ごみの評価についてご質問やご意見等はあるか。
- 委 員：目標値とのかい離がかなりあるが、B にしてしまうと減量等が進んでいくことになってしまう。これでよいのではないかという平均より上の評価になってしまう。あえて反対はしないが、問題がない B だとは思えない。
- 委 員：統計の取り方に少し問題があるのではないか。どのような事業者でどれだけかというのがはっきりと分からないので、事業者としてひとくくりにするのは問題だと思う。場合によっては D にしたいところだが、C を

付けた。統計はどうやって取っているのか。

環境政策課：市内許可事業者がいろいろな事業所から集めてくるので、どこからどれだけ出ているのかはなかなか分からない。数年に1回、組成調査を実施しているの、ごみのおおよその割合についてはつかんでいる。

委員：事業所から出る量全体で統計しているということだが、例えばドラッグストアなどに行くと、ダンボールだけを業者が来て集めることもある。市の統計では全て把握できているのか。

環境政策課：清掃工場に入ってきたものについては統計が取れるが、ダンボールのように別のところに持っていったものは統計には入っていない。

委員：評価の仕方だが、通常は数値が目標に達しているかいらないか、が評価しやすいと思うが、事業系に関してはそれが当てはまらないと思う。例えば景気がよくて百貨店などで皆が買えばごみは増え、景気が悪くなってものが売れなくなれば減る。事業系ごみに関しては、量の増減よりも減量になるような施策をやってきたか、その効果があったかなど、そちらを評価するほうがよいと思う。

会長：それではBでよろしいか。事業系ごみについてはBとする。協働・パートナーシップについてはいかがか。

委員：この項目は高評価とした。理由としては、称賛のAというよりは「頑張りましたでしょう」というAであって、そういう意味ではBでも全く異論はない。できなかったこともあり、それはこれから頑張っていきたいと思いますということ、できたところを評価した。

委員：全般的な文章上の問題だが、1人1日当たりのごみ量は、資源化基本計画の目標を達成していると書いてある。ここだけを見ると「資源化基本計画は達成したのだな」という評価になる。全体のごみ量として、今度の施設ができて削減されると考えられる分を除くと、総量での達成状況はどうだったのか。

環境政策課：ごみとして処理する量40%削減についての進捗は、2019年度は4.9%の削減にとどまっている。ここでの1人1日当たりの目標は、資源等も含んだものであり、2020年度の目標を達成しているということである。

委員：資源化基本計画は40%が目標ということで、これは皆の頭の中に入っている。そうすると、全体量としても順調に40%に行っていると読まれてしまう。だから、全体像について一言を加えておかないと、資源化基本計画が達成しているならよいという評価になるのではということで、少し気になった。新しい設備ができてその削減量を差し引いても、総量として未達成になるのか。

環境政策課長：未達成になると考えている。アクションプラン自体が、施設を除いた部分についての計画であり、その点検は、施設を除いた部分についての評

価につながっている。基本計画が目標を達成しているかどうか少し分かりにくい部分があるので、そのあたりの文言については、会長とも相談をしながら、表現できるように修正したい。

委員：報告書は文章ではなく箇条書きにするとか、誰が見ても分かるように表現を工夫したほうがよい。

委員：市長が見て、何ができていて何ができていないのか、問題点はどこなのかがわかるような報告書にしたほうがよい。

環境政策課長：現在の報告書を基本として、いただいた意見も参考にしたい。

会長：それでは議題1の2019年度の進捗点検の結果については、本日の意見等を踏まえて、事務局のほうで報告書としてまとめていただきたい。

2. 議題

仮称第2次町田市一般廃棄物資源化基本計画について

(1) (仮称) 第2次町田市一般廃棄物資源化基本計画の骨子について

<参考資料1について、事務局から説明>

《意見》

委員：答申して公表するタイミングというのは、例えば2020年度中など、目安がついているのか。

環境政策課長：現在のところ答申時期はこの予定にあるとおり3月を想定している。計画の策定も今年度3月いっぱいになればと考えている。

委員：第2次の基本計画を作るに当たって、最初からアクションプランも一緒に作るのか。スケジュールをみると今年の後半からアクションプランの議論が議題に挙がっているように見える。これまでは、最初に基本計画を作ったが、うまく進まなそうだからアクションプランを上乗せしたという流れだったと思うが、今回は最初からアクションプランを入れる形で進めるのか。なくて済むなら基本計画1本でもよい気もするが、背景をご説明いただければと思う。

環境政策課長：今回、新しい基本計画では大きな方向性等を定め、また実際に推進していくための実行計画も重要だと思っている。この一つ一つの施策につながるようなものを、最初から体現していこうと思っている。

委員：了解した。

<資料2-1、2-2について、事務局から説明>

委員：温室効果ガスの排出量自体が目標になって、ごみ減量の長期目標に登場するのは、すんなりは入ってこない気がする。プラスチックは、回収しても、結局ここで燃やさないだけでよそで燃やすのではないか。そうい

う意味から言っても、温室効果ガスを減らすと言うのは少し違和感があるような気がする。

環境政策課：プラスチックに関しては、資源化に回ったとしてもその先で燃焼される可能性はある。まずは町田市としても、計算上の問題でもあるが、廃棄物行政を語る上で、今はものを減らすだけではなくて温室効果ガスの側面も見ていかなければならない状況にあるので、全体目標の一つとして掲げさせていただいた。

委員：温室効果ガスが発生するのはプラスチックを燃やすからということのようだが、石炭を燃やして電気を作るほうが温室効果ガスは大きい。プラスチックが悪者になっていることは事実だが、燃やさなければエネルギーにならない。これを目標とすることには、非常に違和感がある。

会長：東京都が目指すゼロエミッションは、2050年までには温室効果ガスは実質ゼロにしよう、石油のような資源を使わないということで、前段階で40%の削減とし、植物系のものに代えるなり何なりして、いずれ全廃するというのが最終的な目標になっている。その中の一環だと私は理解している。

委員：東京都は、プラスチックが温室効果の最大の原因として捉えていると理解してよいか。燃やすことによるエネルギー化ということが全然うたわられていない。

環境政策課：廃棄物関連に限定しており、この計算に関しては、環境省の地方公共団体実行計画（区域施策編）において定められているものである。その中のプラスチックごみと合成繊維を非エネルギー起源 CO₂とし、その計算を示させていただいた。プラスチックが全て悪いということではなく、単純に燃やすということではないという話だ。

委員：何をしなければいけないかを考えて、ごみを減らすこととリサイクルを進めることだとすると、3つ目はなくてもよいかという印象を受ける。ごみのことをやってきて、なぜ温暖化の話が出てくるのかと違和感を持たれると思う。ただ環境政策全体を考えると、ごみのことを考えるときにも温暖化を同時に考えないといけない時代になっている。そちらの意識に重きを置くのだとしたら3番目はあってもよいと思うが、政策として実際にやらなければいけないことが量を減らすこととリサイクルをすることであるとすれば、目標1と2で足りてしまっている気がする。

委員：私も同じで、国として目標や政策を世界へ向けて宣言することにつながるという話はよいが、それを即、3本柱として目標の一つに入れて、「それが何だ？」とはならないか。国や東京都の政策と整合性が取れているという問題と、それを目標にあえて掲げる必要があるかどうかは、個人的に疑問がある気がする。

環境政策課長：現在、一般廃棄物資源化基本計画と並行して、環境マスタープラン、第3次環境基本計画を作っている。今回は、前回の環境マスタープランに、新たに地球温暖化の区域施策編を入れていく。その中で、ご審議いただ

いているこちらの計画も、環境マスタープランとは切っても切れないものになってくる。副会長からもお話があったが、CO₂削減、地球温暖化防止とごみは、切っても切れないという時代に入っている。今回この3本目の全体目標を入れることで、違う尺度から問い掛けるような計画にしている。市民の方によっては「自分ごと」と感じる方も増えるのではないかな。また、ごみを減らすこと、プラスチックなどを減らすことでCO₂が減るといった相乗効果も考えられると思う。これまでの基本計画にはなかった新しい視点として、打ち出していきたいと思っている。

委員：今のお話を聞くと、温室効果ガスの排出量を減らすというのはあってもよいかなと思うが、ごみ収集車のルートの見直しや収集車自体を変えるなど、他にも政策がある。その中でシステム全体を見直してごみ排出量を削減していくのであれば納得できるが、プラスチックだけに焦点を当てていることについては何か理由があるのか。

環境政策課長：今回の計画は、一般廃棄物の処理計画を一般廃棄物資源化基本計画として町田市が掲げて推進しており、廃棄物の処理方法等に目を向けた計画として策定する必要がある。一事業者としてどのようにCO₂の削減をしていくか、町田市では独自の環境マネジメントシステムを作っている。CO₂の発生抑制のために「階段をなるべく使いましょう」、「車はできるだけエコなものにしましょう」、「移動は、近いところは徒歩や自転車にしましょう」といったことのほか、「乗用車はできるだけエコカーにしましょう」という施策もある。事業者としてCO₂の削減に努めたいと考えている。

委員：「家庭と大規模オフィスビルからの廃プラスチック焼却量40%」というのは東京都が言っているものだが、町田市がプラスチックを具体的に書いているのは、その部分との整合性なのか。町田市で目標の1つになるというのは、市民から誤解を招く気がする。

委員：温室効果ガス排出量に関連してプラスチックが出てきてしまう理由は、可燃ごみとして燃やされるものの中で燃やした後に二酸化炭素排出につながるものという観点で考えられている。生ごみや紙も燃やしたら二酸化炭素が出るが、それはカーボンニュートラルという考え方で、もともと大気中にあった二酸化炭素を植物が吸収したのが生ごみ、紙になったということで、正味排出ではないという整理になる。そうすると可燃ごみの中のうち、石油製品だけが二酸化炭素の排出源だという考え方になっているので、結果としてプラスチックと合成繊維が挙げられている。

環境政策課長：組成調査においてプラスチックの量は増えている。容器包装プラスチックだけではなくて、プラスチック全体で増えているので、削減に向けて考えなければいけない課題だと捉えている。そういった意味でもプラスチックという言葉はこちらに使わせていただいている。

委員：市は、燃やすことによってエネルギーをつくりましょうと、広報で出し

ているのではないか。高効率のものをつくって、それでエネルギーをつくりますと書いていなかったか。

環境政策課長：今回、新しく整備をしている設備については、プラスチックを燃やして高効率で発電する施設ではなくて、生ごみをバイオガス化して高効率の発電をする施設になる。高効率という言葉はそちらを指している。プラスチックからバイオガス化をするわけではないので、そちらについて、もし間違えやすい表現の広報があるようでしたら、言っていただければ、そちらについては直したい。

委員：エネルギーを得るためには高効率にもものを燃やせばよいわけで、今はどうしようもないから燃やしているのではないかとは思いますが、どうしても残すのであれば、表現を考えたほうがよいのではないか。この文章だといかにもプラスチックは駄目だと言っているような感じがする。プラスチックは元々石油であり、得られるエネルギーは非常に大きなものがある。

環境政策課：まずプラスチックを燃やしてエネルギーを高めようという意思是市にはなく、どうしても焼却しなければいけないものを焼却して、できる限りのエネルギーを得ていこうというのが前提である。それから、こちらに書いてある「一般廃棄物（プラスチックごみおよび合成繊維）」というのは、温室効果ガス排出量を計算する上で環境省の算定式となっているため、この括弧内を取ることはできないものになっている。

委員：この温室効果ガスの排出量を、今は何トンで目標は何トンという数字は出せるのか。

委員：実際に計算しようとする、組成分析のデータを使わないといけなないので、本当にこの量が出ているのかと言われたら、おそらく誰も確認のしようがない数字になる。

会長：今の話と連動しているので、目標設定についても説明していただきたい。

<資料 2-2 について、事務局から説明>

委員：確認だが、プラスチック資源化施設の整備で 4,000 トンとなっている。これは南地区の工場での処理を増やすという意味か。

環境政策課：予定している相原地区と、上小山田地区の資源化施設整備を現在計画しているので、その 2 カ所の分を入れている。

委員：南地区のプラスチックの処理施設は、現状で余裕はあるのだろうか。それによって、少しだろうけれども余力があれば他の地区から回すなど、そういったことをして資源化できないか。

資源循環課長：今稼働している容器リサイクルプラスチックの資源化の施設については、日量 5 トン未満の届けで設置している。5 トン目いっぱいという処理の状況ではない。

委員：全体目標 1 と 2 で、1 人当たりのごみ量が 714 g /人・日、資源化率が 40% と、このようなものは非常に分かりやすく出てきているが、資料 2 - 2 の関連をもう少し分かりやすくしていただくと、市民の人も理解できるのではないかと思う。

委員：全体目標 1 との対応は想像がつく。資料 2 - 2 下部のイメージで、総排出量 12 万弱が 2030 年度に 10 万 9,000 トンくらいに減るとなっている。上には減量で 1 万 1,500 トンを減らすと書いてあり、2030 年度に想定されている人口で割って 714g/人・日にするために、1 万 1,500 トンを減らさなければいけないという話につながっているのは分かったが、資源化率 40%の数字と表をどのように対応させたらよいのか、分からなかった。

環境政策課：言われたとおり、1 人 1 日当たりについては、発生抑制で総量を減らしたものを 2030 年の人口で割って出てくる数字になる。上の表で示すように生ごみや容器包装プラスチックの削減を進めることで 1 万 1,500 トンの削減ができれば 1 人当たり 714 グラムになる。表では排出されたものの中で資源化できるものはどのようなものかを示しているが、それ以外に、収集後工場の中などで資源化する量や、バイオガス化施設でガスになった量を計算して資源化率の分子に加えている。そこまではこちらの表に表現し切れなかったので、割愛させていただいている。

委員：やはり長期計画なので、市民の人が、なるほどと思うものを基本に据えておかないと、結局、目標はよいけれども、訳が分からないねと思ってしまう。その辺はもう少し工夫の余地があるような気がする。

環境政策課長：ご指摘のとおり、市民の方が見てもらって分かりやすいものでないといけないと思うので、工夫できるか検討させてほしい。

会長：分かりやすくするべきではないかという意見もあったので、少し検討していただく。方向性としてはこのような方向でよいかと思う。基本理念をまずしっかりした上で、そして基本方針、個別目標になっているという流れを、もう少し丁寧にしていかないと市民は分かりづらいというのは確かにあるので、検討してもらおう。

委員：ごみの削減や長期計画を示した時に、それが最終的に自分たちのこれからの未来を決める問題であるということが分からないといけない。目標は挙げたが、市が勝手に決めたものだから自分たちと全く関係ないと思われまいよう、事業者も市民も皆がごみを減らすことが、どれだけ自分たちの将来の環境、住みやすい街になるかに関わるか、分かりやすい表現にしてほしいということで、あえて言っているだけなので、その辺は汲み取っていただきたい。

委員：全体目標 3 だが、これでよいと思う。3 行目の「温室効果ガス＝」とい

うところは、あくまでも1行目の後ろのほうにある温室効果ガスの排出量についての説明と考えればよいと思う。そこの言葉の使い方がとても分かりにくくなっている。上の全体目標の「総資源化率＝何々」と同じだと分かるような書き方をしていただければいいのではないか。

会 長：それでは、これまでのご意見をもとに見直していただき、事務局のほうで修正をお願いしたいと思う。本日の議題は以上である。

環境資源部長：本日も遅くまでありがとうございます。分かりづらいというご意見については、市も「自分ごと」として考えてもらいたい、伝わる計画にしていきたいという思いがあるので、工夫していきたい。また、本日は、ごみの量が非常に変化していることをお伝えしておきたい。新型コロナウイルスの影響がさまざまなところに出ており、リサイクル文化センターへの4月、5月のごみ搬入量が、昨年と比べ燃やせるごみは約8%増加、燃やせないごみは約29%増加、ペットボトルが9%の増加となっている。家で生活する時間が長くなり、期間前半は特に家の片付けが進んだと思う。燃やせないごみを出しているのは、いつも数軒に1軒ぐらいだったように思うが、4月は満遍なく各家庭から出ていた。ペットボトルは、今までは外で飲んでコンビニなどのごみ箱に入っていたのが、全て家庭のごみ箱から市施設に行っているというのが実情だと思う。一方、事業系ごみをみると4月、5月は、約32%の減少となっているが、これらの傾向がどうなるのかを非常に危惧している。6月は集計をしているところだが、一般家庭からのごみ量はあまり大きな変化はなく増えたままである。事業系ごみは昨年の数字に近く戻ってきている。家庭ごみがこのまま変わらず、今年度、もしかしたら来年度までトータルで増加が続くのではないかと危惧している。本日、近隣市との協議があり多摩市と八王子市と意見交換をしたが、増加等の傾向は同じでも、割合はだいぶ違っている。町田市の増える割合のほうが多摩市や八王子に比べて大きいのではないかと感じた。事業系ごみの減少も、多摩市や八王子の減少に比べれば大きい。機会をみてごみ量の傾向についてまたご案内できる時間がつくれればと思っている。

会 長：終了宣言